波紋　大規模養豚計画　霧島永水アセス始動　業者方針

意見聞き理解求める

南日本新聞　2010/08.26

霧島市の霧島公民館で４月２０日、住民説明会が開かれた。「不安の声が寄せられている」として、市が養豚場建設を計画する鹿児島農畜産研究公社（同市、鎌田善政社長）と住民の間を取り持つ形で開催。約２００人が集まり、中には「絶対反対」と書かれたはちまきを締めた人の姿もあった。

説明会で同社は年間最大出荷頭数が３０万頭になるなど施設の概要を紹介。環境影響評価（アセスメント）を受託する県環境技術協会の職員はアセスの方法について説明した。

反対する住民から出された「アセスを終えた後から問題が発覚するケースがある。アセスの結果に責任を持てるのか」などの意見に対して、同社は「迷惑をかける施設を建設するつもりはない」（業者の様々な発言から真意とは受け取り難い）と答えた。

説明会は同月２７日にも同市のいきいき国分交流センターで開かれたが、参加者からは「時間が足りない」との声が上がった。さらに６月の市議会一般質問では、建設予定地が南九州畜産興業（ナンチク、曽於市）に売買予約の仮登記がされていることが明らかにされた。事前の環境福祉委員会で、鹿児島農畜産研究公社が養豚場の運営まで「単独で行う」と説明していたこともあり、住民の反発が強まった。

こうした動きに対し、鎌田社長は「もっと詳しい話をしていくべきだった」と語る。これまで建設予定地（１４５ヘクタール）すべてを使うと仮定して年間出荷頭数を３０万頭と説明。アセスも環境に最大の負荷をかける３０万頭を想定して実施している。

しかし、病気の感染を防ぐためにスペースをゆったり取って豚を飼うことや、敷地のこう配を考慮すると、現実的な出荷頭数は１１万６千頭（半分以下ならば受け入れられるのではという思惑が垣間見える、施設が出来上がってからは何とでもなるとの考えからであろう）になるという。現在はこの数字をもとにした検討に入っている。

また、ナンチクから技術支援を受けるなどして、環境への影響を抑える取り組みも進めている。ふん尿はノコクズと土着菌を使い分解する技術の活用を検討。県外から専門家を招くなどして排水やにおいに関する技術も研究している。

最終的な計画はアセス結果を踏まえて、立てる。建設が可能と判断された段階で、ナンチクとの資本提携も視野に入れているという。（明らかに市議会での発言を否定している、加えて住民からの公開質問状に対し「企画・開発・建設・運営と一貫して行います」と回答している。施設完了後さっさとナンチクへ売却し、責任逃れを画策しているのはあきらかである。）

今後、希望者を対象に県外の類似施設を視察してもらう（類似施設名の公開要請にいまだもって答えていない）ことも検討している。鎌田社長は「もっと住民と対話しなければならない。反対する人の意見も聞きながら対応し、理解を得ていきたい」と、慎重に計画を進める考えを示した。